

2019. 9. 17

畑 啓之

モノはいらない 顧客は機能を望んでいる 時代に合った無形の価値が求められている

本日の日本経済新聞の記事は、ズバリ「モノは要らない」モノ不足に時代に生きたものからは、隔世の感がある言葉であるが、大量生産の時代を経て今や少量多品種の時代、さらに一個作りも可能な時代になったということだ。このような時代においては、何を作るかという、そのアイデア自体が重要となる。

新聞記事のグラフでは、無形資産の割合が80%を超え有形資産の価値は小さく、労働に対する対価も低くなりつつある。世の中はいよいよ頭脳競争の時代に入ったということだろう。下手（へた）に物を作ると不良在庫の山になる。

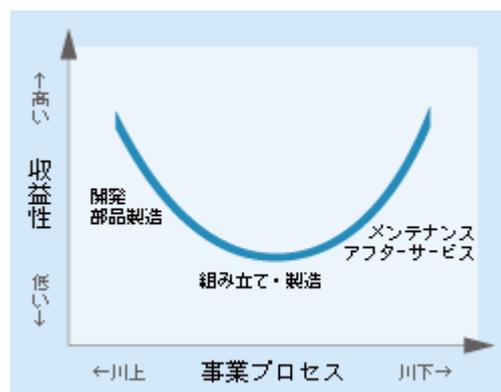
今日のこの現象は、はるか昔より預言されていた。スマイルカーブである。一度はこの図を見たことがあるだろう。これからの人々は広い視野を持ち、多くの要素を自由に結びつける能力、そして自由な発想力を持つことが求められる。柔軟（スマート）な頭脳である。

読売ADレポート o j o 2004年3月号掲載 連載「経済を読み解く」第45回

スマイルカーブ化する日本産業－経済の成熟化がもたらす産業構造の変貌－

<http://www.study-mirai.org/works/ojo0403.htm>

「スマイルカーブ現象」という表現がある。もともとは電子機械産業の収益構造を表す言葉だ。電子機械産業では、事業プロセスの川上に位置する商品開発や部品製造の段階と、川下にあたるメンテナンスやアフターサービスの部分の収益性は高いが、中間の製造段階はあまり儲からない傾向がある。この様子を、縦軸に収益性、横軸に事業プロセスをとってグラフ化すると、両端が高く、中ほどが低い線が描け、ちょうどスマイルマ



ークの口のラインのようになることから、「スマイルカーブ現象」と呼ばれているのである

この現象は、必ずしもすべての産業にあてはまるわけではないという指摘もある。自動車産業のように、部品相互を調和させることの重要性が高い商品、産業の場合には、中間段階の収益性も維持されているという見方だ。 ※この文章に私は多少の疑問がある。調和は開発段階において作り出されるものであるから、川上である。

Neo economy

姿なき富を探る ①

ヒトより知識割食う賃金

知識やデータなど姿なき資産が富の源泉となり、経済はモノや距離、時間といった物理的な制約から解放され始めた。どんな豊かさやリスクが広がるのか。

2018年12月、タイキ工業は東京大学に10年間

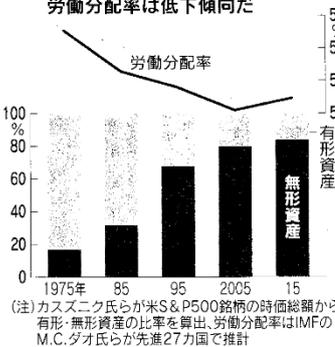
企業価値の源、8割が無形

で100億円の研究開発費を投じると表明した。エアコン工場1棟分に当たる投資の狙いについて、責任者の河原克巳氏は「日本最高の知性にアクセスする権利を売った」と言い切る。

モノは安くない

19年度に約700人の技術者を送り、人工知能(AI)の開発者から哲学の研究者まで交流を重ねる計画。モノの開発だけでなく「目に見えない価値そのものを採り当てなければ国際競争に勝てない」からだ。

一方、無形資産の存在感が増す一方、労働分配率は低下傾向だ



ソニーに提案した。ソニーの半導体事業は黒字だが、営業利益の7割はゲームや音楽の版權など無形資産が稼ぐ。モノを切り離し、無形資産に投資を集中した方が企業価値は上がる。市場に映るいまの経済の姿だ。

米スタンフォード大のエフラート・カスニク講師らによると、米S&P500に社の時価総額のうち、特許など姿の見えない無形資産が生んだ価値の比率は40年間で17%から84%に膨らんだ。無形を意味する英語「intangible」が学術論文に現れた回数も16年までの10年で4倍に増えた。富の源泉はモノから知識やデータへと移った。

無形資産は1年で2割目減り、価値を落とすとする。従来は生産拠点や低コスト地域に移す傾向が原因などされた。最近は無形資産への傾斜を食うのは多くの一般消費者だ。例えば5月、斜が賃金への配分を圧迫しているとの説が目立つ。

オランダの研究者の指摘によると、乗客を自家用車に結ぶサービスでも、00年から14年にかけて世界で無形資産に投資が回るとは3割上昇した。賃金分は5割低下した。大量雇用で経済全体の生産性を上げ、その果実を賃金上昇の形で行き渡らせてきた工業化社会。富の源泉がモノから情報や知識へと移行し、人々が豊かさを手にする方程式も狂い始めた。

(関連記事3面)

Neo economy

(1面参照)

無形資産 果実の分配を



岩田 一政氏
日本経済研究センター理事長

いわた・かずまさ 1970年東大卒業、旧経済企画庁へ。東大教授や日銀副総裁などを経て10年から現職。総務省のAI(人工知能)経済検討会の座長も務める。

無形資産は従来発想ではとらえられなくなっている。価値は経済をどう変えるのか、内外の有識者に聞いた。初回は日銀の元副総裁で日本経済研究センターの岩田一政理事長。

「無形資産の経済への影響をどう捉えていますか。」

「現代の経済成長の源泉となつて、知識や科学的発見が代表するように、無形資産は国の四や産業に波及しやすい性質があるためだ。数十単位でみて経済社会の構造そのものを変える可能性がある。人工知能(AI)が急速に発展する

「無形資産がもたらす影響は産業革命を上回るも、モノの資産との違い、質上げを助けている。モノの質も重要です。」

「無形資産がもたらす利点は、経済全体の生産性が停滯する恐れもある。」

「価値の測り方が難しい。測は今のところネットに集中するソフトウェアなどは金額、企業の労働分配率は伝統的に表せるが、企業が個人情に比べて極めて低い。ネット企業は報の利用から得られた無形資産はスマートフォンのアプリはますます下がると、社会のりのように一瞬で数万人の不満は今以上に高まると、大企業が一気に市場を押し、どの様な処方箋があるか。」

「無形資産には企業的人的資源や経営者の能力も含まれるが、日本はそれが弱く、経営者の革新力の不足や組織の風通しの悪さから、因循している。生え抜きの人材だけでは技術革新に対応できない。働く人の流動性を高め、大企業に無形資産の最大の柱である人的投資を確保する必要がある。」

(聞き手は高橋元彦)

20カ国・地域(G20)が掲げる人間中心のデジタル社会という理念は重要だ。技術進歩はより良い社会を建設するために使われないといけない。無形資産から得られた収益に課税する議論も進みつつあるが、大切なのは分け前が消費者に渡る点だ。米カリフォルニア州知事は巨人IT企業がデータ提供者である個人の富を正当に評価して配当を支払うべきだと主張している。これは本質的な指摘を受け止めている。」

「日本の無形資産の特徴は何ですか。」